

**<法政大学国文学会総会議演・研究発表要旨>ことば
の芸術としての文学とその研究**

著者	西尾 実
雑誌名	日本文學誌要
巻	2
ページ	62-63
発行年	1959-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018962

法政大学国文学会総会

講演・研究発表要旨

一九五八年八月二四日

於・法政大学新館二階

ことばの芸術としての文学 とその研究

西 尾 実

文学とは何であるか。それは「人間いかに生きるべきか。」の問題ととりくみ、それを探究するひとつの方法であると考えられている。そうして、それが、最も射た答えであることは疑いのないことである。

が、これは何も文学に限った答えではない。芸術も、宗教も、科学も、文化のすべては、この問題ととりくんだ探究であることに変わりはない。そこで、さらに、そういう問題ととりくみ、探究をするにしても、抽象的概念的な思惟によっておこなわれる哲学や科学のような文化もあれば、具体的形象的な思惟によっておこなわれる芸

術とよばれる文化もある。そこで、文学もその形象的思惟によっておこなわれる点で、形象的思惟をもって文学を定義しようとするばあいもある。が、これは、文学が芸術のひとつであるという論拠を示すにすぎない。

したがって、文学の文学たる特質をとらえて定義するばあいには、そういう芸術のなかで「音」による形象的思惟としての音楽や、「形」や「色」による形象的思惟としての彫刻・絵画などと區別して、「ことば」による形象的思惟として営まれるのが文学であるとしなくてはならない。しかも、文学における「ことば」は、形象的思惟の単なる衣裳ではなく、その形象的思惟がことばの機能として展開されるところに、文学が「ことば」による形象的思惟」として一元的にとらえられなくてはならない理由がある。われわれの近代文学は、文学活動においても、それを対象とした文学研究においても、文学をことばの機能の特殊的展開としてとらえることを忘れ、あるいは単なる「芸術」としてとらえたり、「文化」のひとつとして定義したりしていたことは、その任務としては射た定義であったにしても、その特殊性をとらえる点では、じゅうぶんな定義に達していなかったことが反省されなくてはならない。われわれの祖先が遺したすぐれた文学作品に対する研究にしても、語学的な研究と文学的な研究とが成立していることはよいとしても、その文学的研究がことばの機能として文学を位置づけ、かつ分析することを忘れているところに根本的な問題を残している。わたしが、近年、「ことばの芸術としての文学」をあらためて問題にしなくてはならなかったゆえんである。

二

「ことば」には十七通りの意味があると小林英夫博士はいつている。それほど多義的である。が、その中のひとつとして昔から今日まで一貫しておこなわれているひとつの意味は、ことばは言語作品としての文章であるということである。しかもそれは、書き読む文章であるばかりではなく、話し聞く文章でもあるということである。そういう意味で、近年用いられてきた「言語生活」に当たるともいえよう。わたしは、ことばの機能が社会的な通じあいであり、したがって、ことばは一回的個性的な歴史的行為であるという関係から、「一對一」の対話・問答と「通信」「メモ」を基本形態となし、「一對多」の会話・討議と「記録」「報告」という発展的な基本形態を成立させ、さらに「一對衆」の公話・討論と「通達」「読みもの」という完成的な基本形態を成り立たせている。ことばの機能は、言語生活としてこういう談話・文章におけるそれぞれの基本形態を成立させるとともに、あるいはことばによる「概念的思惟」としての科学・哲学という専門領域としての「ことばの文化」を成り立たせ、あるいはことばによる「形象的思惟」としての文学という専門領域としての「ことばの文化」を成り立たせる。わたしは、この後者を「ことばの芸術」とよぶことによって、文学の特質を見おとさない考えかたをしようとしている。

三

ことばの芸術としての文学を、このようにことばの機能の特殊の発展として考えてくると、文学は言語生活の基本形態に対応して、ことばによる形象的思惟を主体的真実の表現という方向をとって、独語的形態を成り立たせる。したがって、「一對一」の対話的独語、

「一對多」の会話的独語、「一對衆」の公衆話的独語の三類が、あらゆる作品の基本形態を形作っていることが発見される。

この文学におけることばの機能の発展による三類の基本形態は、個人における文学意識の発達を跡づけることができると同時に、民族における文学史の展開を基礎づけている社会意識の展開を規定する基本的な体系でもある。

われわれの文学研究において、作品の分析が作者の個性をとらえる手がかりに及ぶことができると同時に、作者を創作させた社会意識を的確にとらえる手がかりも、ここに発見されるであろう。したがって、典型的な文学作品においては、その作品の社会的基盤をさぐり、歴史的な時点を求める手がかりは、作品のうえに、このようなことばの機能とその構造を分析することによって、見いだされるであろう。（国立国語研究所長）

伊勢物語の可笑性の問題

——津田氏の「文学に現はれたる国民思想の研究」をめぐって——

滝 瀬 爵 克

まず津田氏は、伊勢の滑稽を誇張したい方から来る滑稽と不調和から生ずる滑稽とに分けた後、「伊勢物語全体の調子がこの滑稽であって、恋も情もみな滑稽に取扱はれてゐる」とし、さらに「かういふ風に、まじめな、または平凡なことは勿論、あはれな光景までが滑稽化せられてゐる。初から滑稽につくられた老女の恋などはい